社会福祉法人 光寿会

まんさく

2025年1月15日 (1)

正月308号

社会福祉法人 光寿会
まんさく編集委員会
和賀郡西和賀町湯本30-76-1
TEL 0197－84－2526
題字 元理事長 太田祖電

年越し前の風物詩♪ひなたぼっこの餅つき ～令和6年12月27日～

この時節がやって来ますと、お年寄りたちは『餅つき仕様！？』で心と体が浮き足立つ様子(^^♪
この日も、職員の餅つきを眺めながら大興奮の皆様♡ 歯応えある美味しいお餅と成りました(笑)

308号『まんさく』もくじ

☆2頁★
＊「共生の場」へようこそ♪
＊冬の防災訓練

☆3頁★
＊想 … 災害を捉える

☆4頁★
＊地域密着型事業紹介
＊寄贈・訪問等

☆5頁★
＊元気です！家族会♪
＊至宝の職人の37年に乾杯♪

☆6頁★
＊「光寿苑の日々」(4コマ漫画)
＊「自然法爾」(お寺さんのお話)
＊「おわりに」

光寿会ホームページでは、まんさくがフルカラーで御覧頂けます(^^♪

『共生の場』へようこそ♪

【光寿苑の新しいお仲間のご紹介となります】

藤原キミヨ さん
＊西和賀町

村上 郁子さん
＊西和賀町

冬の防災訓練 令和6年12月19日

日中の出勤中に火災が起こった想定で、通報・避難・消火の総合訓練を実施しました。

【ぜひ、お問い合わせ下さい♪】

① 営繕・備品修繕、草刈り、除雪 等
② 入居者・家族の相談事への対応
③ 入居者の暮らしを支える介護
④ 入居者の食を支える調理
⑤ 事務全般業務　入居者の送迎
⑥ 洗濯・掃除・シーツ交換業務　等々

職員募集！

想… 災害を捉える 石川県七尾市から発信①

『能登から被災地だより①』竹原了珠 氏

少しお休みしてましたシリーズの再開です。能登半島地震から丸1年…。この度、その震災を経験し、今も向き合い続ける竹原さんに筆をとって頂きます。

私は11年前の2月、「雪見橇(そり)」のお手伝いで光寿苑さんにお邪魔した竹原と申します。光寿苑の利用者さんが乗った橇を「雪あかり」見物のために引っ張ったり、テントで炊出した事が思い出されます。同行した息子は当時小学5年生。西和賀の方々に大変かわいがられ、感謝しています。今も可愛い大学生で、とても優しく、良識ある大人に成長しています。

この息子、妻と娘、そして長男と共に、令和6年の元日はいつもの正月を迎えていました。でも、あの災害から生活が随分変わったように思います。令和6年元日。夕方近くになりようやく来客が途絶えた頃です。囲炉裏のある部屋で、酒杯を傾けて〝一年の計は…〟の格言よろしく、▽真宗聖典△の勉強を…と読み始めたその時、地震が発生しました。どうやって外に出たか覚えていません。家族全員に声掛けて外に集め、同居の障碍者の兄を連れて出てきた直後、本震がきました。一人で立っていられない激しい揺れは長く、建物の壁が崩れ落ち、大地が裂け、止まっている車は激しく揺れ、けたたましいアラート音が地域全体に鳴り響いていました。家族全員でしがみつかないと立っていられません。揺れの間は動けないので、逃げる事もできません。

本震の後の余震の合間に、〝車で安全な所へ！〟と車に乗りましたが、どこが安全なのか、お正月でおめでたくなっている頭では考えられません。地域の方々も同じ有様で、車で逃げようと動いては止まり、そしてまた注意深く動き始め、また止まる…といった動きを繰返しています。勿論、道路の裂け目を避けながら運転する事の恐怖もありますが、どこが安全か分からない事が一番の理由だったのでしょう。

市内にはいくつかの集会場などの公的施設があります。すべての施設で避難所が開設されているはずですが、どこを選ぶか…です。体育館等の広い場所がいいか？逆に公民館のように地域の人たちが集まる小さな場所がいいか？また高台にあるコミュニティーセンターがいいか？最終的には近くの公民館を選んだのですが、理由は、「新しい建物で平屋」だから。余震が続いている中で、今はとにかく安全の確保が優先で、そのためには、「耐震性」のある建物が唯一の条件だったのです。この選択は、今でも正解だったと思います。大きな余震が、その後も何度もありました。大地の上に建っていますから、当然ながら建物は〝ダダダダ…〟と震えますが、大きく撓(しな)ったり、〝グラグラ〟と揺れる事はありません。

「今から地震がきますよ」のアラート音が鳴ると、みんな小さくなって身構え、ひたすら余震が止まるのを待ちます。私は、地域の子どもたちが一塊になっているのを強く抱きながら、

▽大丈夫。何もこわない、こわない。〔何も怖くないよ〕△

と呼びかけていました。その合間の記憶は、テレビに映し出される炎に焼かれている輪島市の様子や、コロナウイルスによる感染予防のために頻繁に行われた空気の入れ替えによる寒さ、そして汚物が流れないトイレからの匂い。今も思い出されます。

【続く】

石川県 竹原了珠

今月の登録者の方々
17 名 様です♪

小規模多機能ホーム「ひなたぼっこ」
住宅型有料老人ホーム「湖畔の宿」

年の瀬に色々楽しみました♪「ひなたぼっこの日常」

【上２枚】門松作り　【右下】１２月の誕生日お祝い　【左下】餅つき観戦！

おかげさまでした

★=光寿苑 ☆=ひなたぼっこ

寄附

★ 匿名希望 様〔西和賀町〕
★ 小専商店 様〔湯本〕

寄贈

★ 佐々木幸子 様〔湯本〕
★ 匿名希望 様〔西和賀町〕
☆ 石川アチ 様〔上野々〕
☆ 髙橋美智子 様〔上野々〕
☆ 髙橋ちづ子 様〔下前〕
☆ 髙橋智也 様〔埼玉県〕
☆ 山口要子 様〔奈良県〕

光寿会へのご支援

面会・外出

〔１２月１日～３１日〕

【対面面会】
★ 延べ58名（対象入居者24名）
☆ 延べ34名（対象入居者7名）

【自宅への外出】
★ 計2名　☆ 計3名

【自宅への外泊】
☆ 計2名

訪問

１２月１５日「門松作り」
☆ お茶会登録の皆様 … 15名

１２３回目も家族会役員・佐々木忠雄さんシリーズです(^^♪
秘境の世界観もいよいよ最終稿★ 存分に味わって下さい♡

元気です！家族会♪

▽人生の終末に…△（最終回）

第123回

光寿苑
家族会副会長
佐々木 忠雄氏

▽お金は使うもの。天国に行くにしても地獄に行くにしても、そこにお金は持って行けないんだから…。△と母はよく言っていた。

年金をもらう年齢になると母は、▽体が丈夫で元気な内は、行った事がない場所や、今までやれなかった事を色々やってみたい！△とよく言っていて、毎年埼玉にいる娘たちの所に、GWと9月に出掛けて行った。孫たちにお小遣いを渡すのが楽しみだったようで、貯金を下ろして意気揚々と行っていたが、帰りに娘たちにお小遣いをもらい、行く前より増えて帰って来ていた。

そんな母が埼玉に行って帯状疱疹にかかり、その後しばらく後遺症に苦しんでいた。結果、これが現在の病気の遠因にもなってしまったようである。

母の人生は、色々な事があった。夫の早過ぎる死…。夫と同じような年齢で亡くなった次女。その度に大変なショックを受けていた。そのような事からお寺の行事には熱心に参加するようになった。

▽あなたもやれる事があったら、お勤めしなさい。△と言われたので、自分としてできる範囲でお勤めさせていただく事にした。

母には、光寿苑にお世話になる事になったが、これからもこのまま変わらず穏やかに過ごしてもらいたいと思っている。光寿苑の方々には、色々とご苦労をお掛けする事があると思うが、これからも宜しくお願いします。

私も家族会役員として、できる事をして行きたいと思っています。

駄文、長々とありがとうございました。

【連載13回でした♡】

完

至宝の職人の37年に

光寿苑を昭和～平成～令和の３７年の長きに渡り支え続けてくれた細川浩さんの引退プチセレモニーの日。穏やかな空気が流れていた。自分よりも他人のこと、光寿苑のことを優先した「利他」の精神と実践。底抜けに明るく、冗談ばかり言っては高らかな声が響き渡る笑い声と笑顔…。光寿苑家族会事務局として、多くのご家族と関わり愛された人柄…。プロ顔負けの除雪作業に、物を直す手先の器用さ。37年間、心よりおかげさまでした♡

ヤマドリの羹（あつもの）の話

《漱石山房での逸話》

第109回　丸田善明（じねんほうに）

漱石は「人嫌い」だったようだが、漱石の寓居（ぐうきょ）にはよく門下生が集まった。仕事中でも構わずやってくるので、木曜日を面会日に決めた。漱石は専ら聞き役で、門下生の談論風発で楽しい会だったようだ。

ある木曜会の日。ヤマドリの肉を土産にやってきた南部の青年があった。ヤマドリは、「羹（あつもの）」（片栗粉などでとろみを付けた熱いスープ）になって文学青年たちの腹を喜ばせた。

その日以来、この南部の青年は小説の原稿を持参して漱石に見てもらうのだが、作品に対する漱石の評価は良くなかったようだ。

ある時青年は、友人が入院費で困っていると言って、漱石に立替えの二十円（現在価格で約二万円）の借金を申し込む。だがその後、この金は約束の日を過ぎても返されず、青年も姿を見せない。様子を見に行った門下生が、赤貧（せきひん）洗う暮らしの様子を話り"無理でしょう"と報告する。

しばらくして届いた詫び状には、「事情があって南部に帰っている。借金は必ずお返しする。」と言い、ヤマドリの肉が添えられていた。

漱石は、「金子（きんす）の件　御介意（ごかい）に及ばず」と書き送り、ヤマドリは羹（あつもの）になって、文学青年たちの腹を満たした。

おわりに

新年が明けた…明けてたんだ…と思う程、例年のような新鮮な気持ちで出発（スタート）できなかった年始め。

実は、年末から始まっていた苑内におけるインフルエンザの感染拡大の幕明けに不安を抱きながら、一方で、"何とか収まってくれ…"という淡い期待感の中で日々を過ごしていた。しかし、その淡い期待は打ち砕かれ、あたり前の新年など無くなっていた。まずは今日一日をどうするか…。

そんな中、能登の事を思った。"被災地（あちら）に比べれば…"と言い聞かせ乗り切ろうとする未熟な実相（わたし）。でも、共通点がある。人は人に支えられ、私（いま）を生きられるという事。今を大事にして下さる皆が尊き相（いま）。

必職員、家族、医療福祉の皆様、感謝です。

光寿会の日々 308号

イラスト：1000

この年末年始、光寿苑はインフルエンザクラスターに向き合っていた。職員も感染したため、減った人数で必死に毎日対応に明け暮れていた。年越も正月も味わうどころではない中、疲労ピークの最中、お年寄りたちからの労いの言葉は、喜びのお年玉と成った。